

勸進帳

長唄

全詞章

三世並木五瓶 作詞

四世杵屋六三郎（六翁） 作曲

天保十一年（一八四〇）三月 江戸河原崎座

〔次第〕 旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん

〔本調子〕 時しも頃は如月の、時しも頃は如月の十日の夜

月の都を立出でて

是やこの行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山かくす霞ぞ春はゆかしける、波路はるかに行く船の、
海津の浦につきにけり

いざ通らんと旅衣、関の此方に立かかる

〔山伏問答〕 夫れ山伏とはいつば役の優婆塞の行儀を受け、即心即仏の本体を爰にて討ちとめ給はんこと、明王の
照覧はかりがたなう、熊野権現の御罰あたらんこと、立所に於て疑あるべからず、おんあびらうんけんと、
数珠さらさらと押揉んだり

〔勸進帳〕 元より勸進帳のあればこそ、笈の内より往来の、巻物一卷取出し、勸進帳と名づけつつ、高らかにこそ読み
上げけれ

天にも響けと読み上げたり

感心してぞ見えにける

士卒が運ぶ広台に、白綾袴一ト重ね、加賀絹あまた取り揃へ、御前へこそは直しけれ

こは嬉しやと山伏も静々立つて歩まれけり

〔強力の疑い〕 すはや我が君怪しむるは、一期の浮沈ここのりと各々あとへ立かへる

金剛杖をおつ取りて、さんざんに打擲す

通れとこそは罵りぬ

方々は何故に、斯程卓しき強力を、太刀かたな抜き給ふは、目だれ顔の振舞臆病の至りかと、皆山伏は
打刀抜きかけて、勇みかかれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えにける

士卒をひきつれ関守は、門の内にぞ入りにける

ついには泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる、判官御手を取り給ひ

〔判官落〕 鎧にそひじ袖枕、かたしくひまも波の上、ある時は船にうかび、風波に身をまかせ、又ある時は山背の、
馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しあり夕波の、立ちくる音や須磨明石、兎角三歳の程もなく、痛はしやと、
萎れかかりし鬼薊、霜に露置く斗りなり

互に袖を引きつれていざさせ給への折柄に

〔二上り・酒宴〕 実にげにこれも心得たり、人の情の盃をうけて心をとどむとかや

今は昔の語り草

あら恥しの我が心、一度まみえし女さへ

迷の道の関越えて、今又ここに越えかぬる

人目の関のやるせなや

アア悟られぬこそ浮世なれ

面白や山水に、面白や山水に盃を浮べては、流にひかるる曲水の、手まづさへぎる袖ふれて、いざや舞をまほうよ
〔舞・延年〕 元より弁慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌

是なる山水の落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水、鳴るは瀧の水

〔滝流し〕 鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、とくとく立つや立か弓、心ゆるすな関守の人々、
暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩に打ちかけ

虎の尾を踏み、毒蛇の口を逃れたる心地して、陸奥の国へぞ下りける